慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Sir Gawain and the Green Knightにおけるthe Temptationについて：その詩的技法に関する一考察
Sub Title	On the "Temptation" in Sir Gawain and the Green Knight
Author	池上, 忠弘(Ikegami, Tadahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.272(75)- 285(62)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0285

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Sir Gawain and the Green Knight における the Temptation について

—— その詩的技法に関する一考察 ——

池　上　忠　弘

I

Percy Folio MS.（17世紀中期）の中に *The Green Knight* がある。[1] 1部と2部に分れた，516 行の six-line stanzas の ballad である。*Sir Gawain and the Green Knight* [2]（以下 *SGGK* と略す）と直接の関係があるかどうかは問題のあるところであるが，多少古い要素があり，[3] 簡潔で平易で圧縮され詩型を全く変えた作品になっているにしても，*SGGK* とはかなり密接な関係があると考えてよいだろう。*The Green Knight* の方がむしろ普通の ME metrical romances に近い形態と内容を持っている，一般大衆向きの popular poetry である。従って *SGGK* の作者が熱をこめて詳しく語っている部分も *The Green Knight* の作者とその聴衆にはさして興味がないとみえて簡単にすまされていて，出来事が軽やかな詩型に乗って担々と進み，あっさりと終りまで運ばれて行く。*SGGK* の the Green Knight（以下 GK と略す）に相当する人物は，物語の初めに "the west countrye"（l. 39）に住む "Sir Bredbeddle"（l. 40）という名の騎士だと明示され，その奥方は Gawain をまだ見ぬ中から ひそかに恋いこがれている。奥方の母親（*SGGK* の Morgan la Fay に当る）で魔法使の "Agostes"（l. 49）は娘を心配して，娘のために Gawain をこの国に連れて来ることにする。その仕事を果す者として Bredbeddle をアーサー王の許に派遣する。これがこの作品の中心となる動機で，*SGGK* と大きく違う点の第一である。The Beheading Game（以下 BG と略す）の仕返しを受

けるため旅をしている中に Bredbeddle の美しい城を見付けて，一日だけ滞在することになる。城主の狩猟も一回だけで簡単な記事ですまされているが，それでも *SGGK* に出てくる獲物は一通り揃ってはいる。

The greene Knight went on hunting; (l. 361)

.....

the Knight in the fforrest slew many a hind,
other venison he cold none find
  but wild bores on the plaine.

plentye of does & wild swine,
foxes & other ravine,
  as I hard true men tell. (ll. 406-11)

域主の狩猟中に "the old witche" (l. 364) は恐れてはいけないと娘を力付けて，Gawain の居所に連れて行く。ここで所謂 *SGGK* の the Temptation（以下Tと略す）の場面が展開される訳であるが，これもいたって簡単で，一回で事が運ばれてしまい，おとなしい奥方が三度接吻して終る。母親は云う。

shee saith, "gentle Knight, awake!
& for this faire Ladies sake
  that hath loued thee soe deere,
take her boldly in thine armes,
there is noe man shall doe thee harme;"
  now beene they both heere.

the ladye kissed times 3,
saith, "without I have the loue of thee,
  my life standeth in dere."
Sir Gawaine blushed on the Lady bright,
saith, "your husband is a gentle Knight,
  by him that bought mee deare! (ll. 373-84)

Gawain が愛の印として受取るのは純白の "a lace of silke" (l. 397) で，これは後に "Knights of the bathe weare the lace" (l. 503) ということになる。城主と Gawain の間の獲物の交換も型通りに行われる。城主は Gawain に打撃を与えるため緑の姿に変えて BG を行うが，それがすむと Gawain と一緒に Arthur's court に出向いて，その臣下となる。これが*SGGK* と相違する重要な第二の点である。

II

The Green Knight の作詩者と *SGGK* の作者とでは，結局文学に対する態度が根本的に違うことが両者を比較してみることによって明瞭となる。後者には，作品全体を貫くはっきりした moral theme が派手に表面に出ることなく存在している上に，前者とは興味の対象が全く異り，出来事を順に述べるだけでなく，更にその本筋から逸脱することなく，関心を引く対象物があればそれを今日の映画のように先ず全体的に把握し，ついで重点を移してその部分々々をなめるように画像を積重ねつつ描いて行く，[4] この重点的な，云わば脱線的な描写法に特徴的なものを見ることが出来る。もう一つ補足して云うならば，作者の狙いがたえず主人公 Sir Gawain の knightly conduct に向けられ，彼のその時々の心の動きが，つまり心理的内容とも云えるものが色々の方法を通じて，内面的に，外面的に描かれていることが挙げられよう。[5] 心理的な面の関心は一般の ME metrical romances の作者達にはほとんどなかったところである。

さて，描写が念を入れて詳しく，かなりの長さにわたっている部分を物語の順に列挙すれば，次のようである。

1. 冒頭のブリテンの legendary history (Brutus)。
2. Camelot のアーサー王宮廷におけるクリスマス・シーズンの饗宴。
3. GK の突然の出現，GK と彼の乗馬の姿。
4. Gawain と GK の BG のやりとり。
5. 四季の変遷。[6]
6. Gawain の出発の身仕度，彼の楯につけられた "þe pentangel" の象徴的意味の説明。[7]
7. 心楽しまぬ旅の地理的道程（North Wales など）とその途上の冬の景色。[8]
8. Christmas Eve に見付けた城及び一夜の宿を求めたその城中の華麗さ。
9. 3度（3日間）にわたる城主の狩猟（鹿狩，野猪狩，狐狩）。
10. 城中における Gawain と奥方の3度の the Temptation Scenes（奥方は第一日に一回，第二日に二回，第三日に三回接吻する）。
11. Gawain と彼の馬 Gryngolet の武装。
12. GK と Gawain の BG のやりとり。
13. GK が自分の素状を明かし，BG と T の意義を説明。
14. 帰国した Gawain の報告。

なかでも Hunting（以下 H と略す）と T [9] の場面には最も多くのスペースがさかれている。F. Madden の divisions の第3部がそれに当る。作者の構想は中世詩法を見事に駆使した意図的なもので，充分その効果を発揮していると云えよう。H と T は共に同

時性をもって平行して進行する出来事で，展開される場所は一方は城外の猟場，もう一方は城内の Gawain の寝室になっている。いずれも三回づつ行われるが，一直線的にならざるをえない物語構成上の処置法は，三回ともそれぞれ次のようになっている。先づ H の場面が早朝出発の時から始って，獲物を追込んだ活気ある局面に来ると，急転して城中の T の場面に移り，それが一段落すると，又 H の場面に戻って獲物の捕獲，獲物の処分 (butchering and dressing) が描かれ，ついで Gawain と城主の "forwarde" に従った獲物の交換になる。晩餐では互いに楽しそうに軽口をたゝき合い，酒を飲みながら次回の獲物の交換の約束を結ぶという次第である。T は前後を H に挾まれている形である。両者は時間的に平行して展開され，更に literary meaning の上に allegorical meaning を重ねて，そこで緊密に関連し合っているように思われる。以上指摘してきた諸点に留意しつつ，T を中心に考察を進めて行きたいと思う。

III

Christmas Eve に一夜の宿を与え給えと主イエズスと聖母マリアに祈りを捧げながら馬を進めている時, Gawain は美しい城を認めた。その時からこの問題の場面が始まる。[10] Christmastide の祝祭に沸立つ城中に快く迎え入れられ，堂々たる剛毅な城主に会う。名高い Gawain だとわかるや，人々の喜びは頂点に達し，特に彼の礼儀作法と優雅な話し方に多くの期待が寄せられる。

'Now schal we semlych se sleȝteȝ of þeweȝ
& þe teccheles termes of talkyng noble;
Wich spede is in speche, vnspurd may we lerne,
Syn we haf fonged þat fyne fader of nurture; (ll. 916–19)

.....

In menyng of mareneȝ mere
þis burne now schal vs bryng,
I hope þat may hym here
Schal lerne of luf-talkyng. (ll. 924–27)

美しい奥方も同様の期待をいだいて現われるが，その姿は，

Ho watȝ þe fayrest in felle, of flesche & of lyre
& of compas & colour & costes of alle oþer,
& wener þen Wenore, as þe wyȝe þoȝt; (ll. 943–45)

と rhetoric 上，典型的に描かれている。中世後期詩法の典拠としては Matthieu de

Vendôme の *Ars Versificatoria* (c. 1175) と Geoffroi de Vinsauf の *Poetria Nova* (c. 1208-13) が広く知られている。古典以来の figures of rhetoric を受継ぐ[11]と共に verbal ornament が顕著で，特に formal literary description が amplificatio の一項目ではあるが重要視されている。人物の描写は人の外観を扱う effictio と人の moral qualities を扱う notatio より成るが，[12]一般には外観の details を列挙することが多い。その代表的なものに Helen を典型にした descriptio feminae pulchritudinis [13]がある。叙述は美女の頭から始まり，足にまで及ぶ——顔，毛髪，眉，頬，鼻，口，歯，首，腕，手，胸，上半身，腹，脚，足（耳の如き見えない部分は除外される）。身体の次は服装に移る。作者の腕の振いどころはかゝる典型の上にどのように，又どのような洗練された装飾的，現実的 detailes を加えるかにある。The *Gawain*-poet は典型的な列挙的方法を軽くさけて，美しい奥方と "an auncian" (l. 948) の対立，つまり Youth と Age の対立という方法を用いて，[14]奥方をくっきり浮彫しようとしたのである。

Bot vn-lyke on to loke þo ladyes were,
For if þe ȝonge watȝ ȝep, ȝolȝe watȝ þat oþer; (ll. 950-51)

Gawain は早速奥方と老婦人のところに挨拶に出掛け，お互いにすっかり打解ける。

þe alder he haylses, heldande ful lowe,
þe loueloker he lappeȝ a lyttel in armeȝ,
He kysses hir comlyly & knyȝtly he meleȝ;
þay kallen hym of a-quoyntaunce, & he hit quyk askeȝ
To be her seruaunt sothly, if hem-self lyked. (ll. 972-76) [15]

Gawain が旅の目的を語ると，城主は the Green Chapel はすぐ近くだと云って彼を引留める。かくて Gawain は元日の朝までこの城に滞在することになり，H と T は上述の伏線的敍述のもとに12月29，30，31日の3日間に亘ってくりひろげられるのである。

先ず第1日は鹿狩から始まるが，第2日の野猪狩と共に descriptio の convention に従っている。狩猟は本質的に国王及び貴族階級の勇壮なスポーツで，中世ロマンスでは屢々取扱われている。狩猟術については，作者とほぼ同時代の *Art de Vénerie de Twety*, *Livre de Chasse du Roy Modus* (c. 1360), 英語で書かれたものでは *The Master of Game* of Edward (1406-13), *The Book of St. Albans*, 時代が降って Du Fouilloux の *La Vénerie* (1561), Turberville によるその英訳(1576)に詳しいが，鹿も野猪も狩猟では noble games ("beasts of venery") とされている。作中では禁猟期の関係で，hinds

と does のみが注意深く選ばれて猟の対象になっている。その狩猟や獲物の処理の様は生生と敍述され，狩猟の technical terms がさかんに使われている。鹿の allegorical meaning については John Guillim の *A Display of Heraldry* (1724) にある記述——"exceeding quickness of Hearing, to foreknow his Hazards, and so the sooner to prevent them; …… exceeding Speed of Foot, to fly from the Danger when it approacheth," 及び "wise and politick, and well foreseeth his Times and Opportunities;…… unwilling to assail the Enemy rashly, but rather desirous to stand on his own Guard honestly, than to annoy another wrongfully," [16]に注意しよう。これは Gawain と奥方の対話の性質に符合し，それを説明するものとなる筈である。H. L. Savage の解釈では，城主の追う game animals と奥方の追う Gawain が parallel だということで，奥方に対する Gawain の態度としてだけ説明されているが，奥方のことも彼の antagonist として充分考慮さるべきであろう。[17]

城主達が朝早く狩に出て行ってしまうと，早速奥方は微睡んでいる Gawain を訪ねる。入口の方で注意深くそっと戸が開く音を聞いて，彼は夜具から頭をもたげ，カーテンの隅を上げてよく見てみるとあの奥方ではないか。彼はびっくりして再び身を横たえ，狸寝入りをきめこむ。奥方はベッドの側に腰をおろして彼の目覚めるのをじっと待っている。しばらくして彼女の目的を確めた方がよいと考えてやおら目を開き，驚いたような振りをし，十字を切ってたずねた。起きて身仕度しようとする彼をベッドに押えて，自分の prisoner となった騎士に思いのまゝ語りかける。しかも鄭重に対している courteous knight の度胆を抜くような，Courtly Love の方式を乗越えた直接的な発言をする。

& now ȝe ar here, iwysse, & we bot oure one;
My lorde & his ledeȝ ar on lenþe faren,
Oþer burneȝ in her bedde, & my burdeȝ als,
þe dor drawen, & dit with a derf haspe;
& syþen I haue in þis hous hym þat al lykeȝ,
I schal ware my whyle wel quyl hit lasteȝ,
with tale;
ȝe ar welcum to my cors,
Yowre awen won to wale,
Me be-houeȝ of fyne force
Your seruaunt be, & schal.' (ll. 1230-40)

Courtly Love の原則では lady が封建領主に相当する sovereign の立場，騎士は唯々諾々と仕える servant で，貴婦人を求めるも大抵報われずに終るのだが，こゝではその逆で，しかも奥方がいつも攻める側にある。

Bot hit ar ladyes in-noȝe þat leuer wer nowþe
Haf þe, hende, in hor holde, as I þe habbe here,
To daly with derely your daynte wordeȝ,
Keuer hem comfort & colen her careȝ,
þen much of þe garysoun oþer golde þat þay hauen; (ll. 1251-55)

と語って，すべての人々の憧れの的を今自分の手中に収めていることを神の恵みと思って喜ぶ。特に親しみをこめた "þe" の呼掛けに注意しなければならない。Gawain は奥方の語りかける激しい攻勢に防戦一方でたじたじとなりながらも，courtesy を失わぬよう苦労して巧みに問答に答えている。彼が奥方の "fraunchis nobele" (l. 1264) を称えるとそれを否定しながら，自分がもし世間のあらゆる女性に劣らず，又世の富を残らず手中に収め，自分の夫 (a lorde, l. 1271) を選ぶとすれば，Gawain をおいて外にはいないとやり返す。これに対して彼ははっきりした決定的な返事をする。

'I-wysse, worþy,'quoþ þe wyȝe, 'ȝe haf waled wel better;
Bot I am proud of þe prys þat ȝe put on me,
& soberly your seruaunt my souerayn I holde yow,
& youre knyȝt I be-com, & Kryst yow forȝelde !, (ll. 1276-79)

彼の発言は所謂 Courtly Love の思想と根本的に相容れないものである。Ovidius の *Ars amatoria* をモデルにし疑似学術書の体裁をとった，Andreas Capellanus の *De arte honeste amandi* (c. 1184-86) にあらわれた Courtly Love の観念では，恋愛の規則第1条 "Marriage is no real excuse for not loving" (Bk. II, Chap. viii)[18] と書かれ，cours des dames の判決[19]にもある通り，amor と maritalis affectio を区別し，恋愛では後者を全く無視し，前者こそ superior の立場にたつ lady によって lover としての彼女の騎士に自由に与えられる reward で，彼を高める力を持ち，騎士の美徳の源泉とされている。騎士に敬愛される女性は単なる woman ではなく，noble lady でなければならない。この考えは特に Arthurian romances に結付けられ，Lancelot-Tristan group では顕著にあらわれる。これらは封建制度下の城中に居住する貴婦人達が政略結婚外の理想的な love affairs を想像しての産物であろう。たゞロマンスの作家達は作品で spiritual love 或は amor purus を取扱ってはいないが，愛にはennobling love と destructive love と

があることは承知しており，しかも男女間の愛の力は男に良い影響乃至悪い影響を与えるものであることを認めている。[20]つまり愛にはよい面と悪い面がある。教会では一般に結婚愛はよいが，情熱的な愛や恋愛上の愛はいけないとみなしている。[21]教会と宮廷の考えは対立的である。

SGGK では Gawain は Courtly Love と相違する発言をしたが，ロマンスには結婚（愛）を取扱ったものもあるにはあるが，こゝでは Gawain の態度，そして作者のそれは愛を結婚に関係付けようとするイギリス風の恋愛観[22]及び女をイヴの娘，男を罠に掛ける者，官能的誘惑者と見做す禁欲的な traditional Christianity の立場のあらわれと考えたい。作品にでてくる騎士は prowess, loyalty, generosity, moderation, honour, courtesy 等の virtues の世俗的な面だけの完全さでは不充分なのである。むしろその面はその背後の根本にある Christian perfection の反映と考えるべきで，騎士は自分に課された Christian virtues を忠実に遵守しなければならない。そして聖寵の助けをうけて perfection に達しようと努力するのである。[23]この過程は当然 quest の型をとる。

奥方の本当の意図と Gawain の振舞は

> & ay þe lady let lyk a hym loued mych;
> þe freke ferde with defence & feted ful fayre. (ll. 1281-82)

に明らかである。そして最後に，奥方は自分の仕掛ける love-making を避けている彼を不審がって，本当の Gawain 様ではないらしいと脅かす。[24]

> 'So god as Gawayn gaynly is halden,
> & cortaysye is closed so clene in hym-seluen,
> Couth not lyȝtly haf lenged so long wyth a lady,
> Bot he had craued a cosse bi his courtaysye,
> Bi sum towch of summe tryfle at sum taleȝ ende.' (ll. 1297-1301)

彼は止むをえず奥方の "comaundement" (l. 1303) [25]に従って彼女の接吻を受ける。しかし彼からは進んで接吻はしなかった。奥方は本来男の立場である lover のように積極的である。

第2日は野猪狩である。一日中この獰猛な野獣を追いまわし，最後に城主が組みついて仕留める。猟犬のこだまする吠え声など auditory imagery が印象的である。野猪の allegorical meaning として "of bold Spirit, skilful, politick in warlike Feats, and…… of that high Resolution, that he will rather die valorously in the Field, than he will

secure himself by ignominious Flight.……fierce in the Encountring his Enemy, and……bear the Shock or Brunt of the Conflict with a noble and magnanimous Courage;"[26]
に注意しておこう。

奥方はやはり早朝から "His mode forto remwe" (l. 1475) と思って訪れる。彼が鄭重に迎えると，昨日教えたばかりの出迎えた者に機をみて接吻するという社交上の礼儀作法を彼が忘れていることをなじり，躊躇する彼に向って，もし接吻を断わるような不躾な者がいたら力ずくで無理にでも要求すべきだと云う。しかし Gawain の答えは恋愛の規則31ケ条の第5条 "that which a lover takes against the will of his beloved has no relish"[27]そのものである。奥方は更に騎士道の精髄をロマンスに述べられた騎士の行為にたぐえて語る。

& of alle cheualry to chose, þe chef þyng a-losed
Is þe lel layk of luf, þe lettrure of armes;
F〔or〕 to telle of þis teuelyng of þis trwe knyȝteȝ,
Hit is þe tytelet token & tyxt of her werkkeȝ,
How l〔edes〕 for her lele luf hor lyueȝ han auntered,
Endured for her drury dulful stoundeȝ,
& after wenged with her walour & voyded her care
& broȝt blysse in-to boure with bountees hor awen. (ll. 1512-19)

そうして立派な騎士である Gawain は若い者に "sum tokeneȝ of trweluf craftes" (l. 1527) を教えるべきだと云う。[28]ところが今迄の記述でもわかる通り，Courtly Love の道によりよく通じているのは奥方のようで，その蘊蓄を傾けて色々と手をかえ品をかえて難問を彼にあびせかけるのである。だから彼はいみじくも卒直にこう返答する。

Bot to take þe toruayle to my-self to trwluf expoun
& towche þe temeȝ of tyxt & taleȝ of armeȝ
To yow þat, I wot wel, weldeȝ more slyȝt
Of þat art, bi þe half, or a hundreth of seche
As I am oþer euer schal, in erde þer I leue,
Hit were a fole fele-folde, my fre, by my trawþe. (ll. 1540-45)

この場面の終りでもやはり奥方の目的とするところが明らかに示される。

þus hym frayned þat fre & fondet hym ofte,
Forto haf wonnen hym to woþe, what-so scho þoȝt elleȝ, (ll. 1549-50)

しかし Gawain が見事に身を守ったので事無きをえたが，彼はほとほと手をやき，全く彼女の愛想のよさには驚くと同時に怒りさえ感じた。[29]

第3日は狐狩である。狩猟では狐は伝統的に a beast of vermin と考えられているので，その cunning と duplicity の性質を嫌がられて heraldry では取扱われていない。[30]作品中でも "þef" (l. 1725) と呼ばれている。[31]又ロマンスでは狐狩の描写がほとんどなく，珍らしい。なお "Reynard" (ll. 1728, 1898, 1916, 1920) という仏語系の言葉が fox の外に使われている。

奥方は意を決して早朝からおしかけて来る。

Bot þe lady for luf let not to slepe,
Ne þe purpose to payre, þat pyȝt in hir hert, (ll. 1733-34)

今度は最後の機会でもあり，誘惑の準備は入念をきわめる。彼女は自分の physical beauty を誇示するかのように，胸も背も露わな官能的な出で立ちで，愉快げにからかい半分，寝ている Gawain を起す。彼は指定された日に到着し GK に会えるだろうか，又 BG で彼の受けねばならない運命——死を思って深い憂愁に閉ざされていたが，美しい姿を見て心も晴れ，楽しそうに迎える。だから聖母マリアの加護が "hir knyȝt" (l. 1769) になければ由々しい大事にたちいたったであろう。[32]しかし奥方の最後の攻撃はまさに熾烈であって，彼の防戦は次第に弱まり，ために彼は courteous knight として全く土壇場に追いこまれる。名声高き騎士が本来の真実の騎士たるべきか，或は lady に仕える忠実な servant としての騎士たるべきかと，自らの honour の選択に苦慮し，迷う。こゝで Gawain という典型的 character が絶対絶命の条件下におかれて，試練を受けているのである。

For þat prynce[s] of pris de-presed hym so þikke,
Nurned hym so neȝe þe þred, þat nede hym bihoued
Oþer lach þer hir luf oþer lodly re-fuse;
He cared for his cortaysye, lest craþayn he were,
& more for his meschef, ȝif he schulde make synne
& be traytor to þat tolke þat þat telde aȝt. (ll. 1770-75)

奥方は自分のすぐ側で寝んでいながら，恋に悩む世のすべての女性をさしおいて自分を愛してくれないのはおかしい，悪い人だと怨みを云い，きっと "a lemman, a leuer" (l. 1782) が居て，その人に誠実を誓ったせいだろうと詰問すると，彼は意中の女性はいないし，こゝしばらくは持とうと思わないと答える。奥方は心を痛め最後の接吻をしてからせめてもの心の慰みに別れの贈物を求める。彼は旅行中とて碌な物も持ちあわ

せていないからと云って，鄭重に断わる。すると奥方の方から先づ指輪を，ついで帯(my girdel, l. 1829)を差出す。彼は一旦はこれを断ったが，この帯の持つ不思議な力を説明されるとこれからの自分の運命を思いあわせ，つい気を許して彼女の執拗な懇願をきゝいれてしまう。こうして courtly dialogues で進行した T のドラマは成就され，奥方の役目は終った。帯のことは絶対秘密である旨云われて隠すのであるが，これが物語の結末へと進み，後の BG で彼が首に打撃の傷——"vn-trawþe" (l. 2383) の印——を受ける原因となる。

Ⅳ

運命の BG が常に心から離れなかったが，Gawain の態度はあく迄も恋愛の訓え13ケ条の第11条 (BK. I, Chap. vi, Fifth Dialogue) "Thou shalt be in all things polite and courteous" [33]にあるように courteous knight のそれであった。奥方の自分に対する love-making を sin だと見きわめ，[34]語り手は聴衆（多分読者）[35]に彼が test されていることを気付かせ，suspense を抱かせながら先へ先へと話を進めて行くが，彼自身は自分の考えをあらわに表に出ぬよう，自らを抑制し，注意を怠らずに努力している。そして彼が Courtly Love に基く騎士の役割に initiative を取ることを嫌っているので，自然その役が相手の lady に移って立場が変ってしまう。*SGGK* における Courtly Love sitnation は，本来のありかたの逆を行っているのは興味深い。これは単なる irony ではない。常套的道具立ての adventure も love-affairs も彼を試す手段である。Courtesy に徹した Gawain ほどの善き性質を多く持っている人物でも，結局世俗の現世では一寸した愚かしいことで女のため躓かざるをえないのである。彼は自らの不誠実を嘆き，自分の人間的 "cowarddyse & couetyse" (l. 2374) を認めて呪わざるをえない。

BG が終った時，Bercilak にもう一度城に戻って Christmas season を心ゆく迄楽しみ，"your enmy kene" (l. 2406) の妻と和解したらどうかと云われるが，彼はきっぱり断る。

> & comaundeȝ me to þat cortays, your comlych fere,
> Boþe þat on & þat oþer, myn honoured ladyeȝ,
> þat þus hor knyȝt wyth hor kest han koyntly bigyled. (ll. 2411-13)

と云ってから，かって富み栄えた気高い人達も女の策略にあって不幸になっている——アダムはイヴに，ソロモンは多くの女達に，サムソンはデリラに，ダビデも又バテシ

バに欺かれている。だから自分ごときが欺かれたとしても止むをえない云々と釈明している。この言葉は作品の締め括りに用いる常套的な sententia or proverb に類するもので，antifeminism の homiletic tradition の表現である。[36] *SGGK* では，Courtly Love に対する negative と positive の考え方，即ち女性に対する cynicism と idealism が共にあらわされていると云えよう。The *Gawain*-poet の考えは前者に属するようである。しかし彼はこちこちの moralist ではない。

Cleanness などによれば，彼は *Le Roman de la Rose*, フランス語版の *Maundeville's Travels*, *Cursor Mundi*, フランス語の *The Knight of La Tour-Landry* を知っていたし，[37]其他 Biblical Quotations は非常に多い。中世の rhetoric もよく知っている。狩猟の技術も心得ている。これは作者が地方の貴族階級に接触のある，14世紀のすぐれた知識人であったことを示している。

作者の意図は，ロマンスの華やかさの背後を見抜ける高級な聴衆が求めている，複雑で深い意味の相を重要視している。同一MS. の *Patience*, *Cleanness*, *Pearl* も彼の作品だとするならば，彼は本質的に宗教的な詩人だと云っても差支えないだろう。しかしこゝでは彼は物語を積極的に moralize しようとはしない。Serious な面だけがあるのではない。作中に時々語り手の詩人 "I" が登場したり，humorous で comic な表現や場面が沢山あることも見逃すわけには行かない。[38]もともとこの事件は "a crystemas gomen" (l. 283) から始って大きくなり拡って行ったのだ。

SGGK は対立的な secularity と religiosity, jest と earnest [39]の要素がほどよく調和し，全体に有機的統一がとれ，大部分 'high style' で語られた aristocratic romance である。この詩人は既に黄昏ている騎士道を，これ又フランス，ドイツでは流行期をすぎたアーサー王物語の背景という，過去の situation において，振返りながら眺めている。彼は fiction の世界に映された現在の状態をみつめているのだ。地方豪族の要望に応じて冬の祝祭の娯楽を提供したが，彼には中央のロンドンの新しいフランス流文学に対抗する意気ごみがあったことだろう。かくて頭韻詩の伝統を継ぐ，地方言文学の華が突如イギリスの北西部で咲いたのである。

註

1. J. W. Hales & F. J. Furnivall (edd.), *Bishop Percy's Folio Manuscript*, Vol. II, pp. 56-77, London, 1868.
2. 拙論での引用はすべて次のテクストによった。*SGGK*, re-edited by I. Gollancz, with Intro-

ductory Essays by M. Day and M. S. Serjeantson, Ist printed 1940, Reprinted 1950, London (EETS). 外に J. R. R. Tolkien & E. V. Gordon の版 (Oxford, 1952[6]) も参照した。

3. J. R. Hulbert, "*SGGK*," *Modern Philology*, xiii (1915), pp. 433-62. 彼は 'Fairy Mistress Story' 説を主張するが, G. L. Kittredge は古い要素を作詩者の alteration と考える。*A Study of GGK*, Gloucester, Mass., 1960[2], pp. 125-136, pp. 282-89.

4. Marie Borroff, *SGGK: A Stylistic and Metrical Study*, New Haven, 1962, pp. 120-29.

5. Dorothy Everett, *Essays on Middle English Literature*, Oxford, 1955, pp. 74-85.

6. D. A. Pearsall, "Rhetorical 'Descriptio' in *SGGK*," *MLR*, L (1955), p. 131. 彼は rhetoric 上,「機能的」な働きをしていると考える。

7. R. H. Green, "Gawain's Shield and the Quest for Perfection," *ELH*, xxix (1962), pp. 121-39.

8. D. A. Pearsall, *op. cit.*, p.132.

9. このテーマを扱った物語としては *Ider*, *Hunbaut*, *Le Chevalier à l'Epée*, *The Carl of Carlisle*, Italian canzoni 及び多くの folklore が挙げられるが, *Ider* では妻が夫の命令で激しい恋をするが, 其他の作では女は受身の立場である。Hulbert と A. Buchanan は Kittredge と違って, BG と T の2テーマがすでにアイルランドの *Fled Bricrend* にあると主張し, R. S. Loomis は *Mabinogion* の 'Pwyll episode', Chrétien de Troyes の *Percival* の中の 'Guingambresil episode', *Diu Krône* の 'Gasozein episode' にそれらを求める。なお Laura H. Loomis は, analogues の関係から, 奥方を Morgan la Fay の分身と考える。"*SGGK*" (*Arthurian Literature in the Middle Ages*, ed. R. S. Loomis, Oxford, 1959, pp. 534-35.) 三度にわたる The Temptation Scenes には, 夫々内的意味があると思う。例えば D. W. Robertson, Jr., *A Preface to Chaucer*, New Jersey, 1962, p. 384 参照。

10. MS. を注意すると, 3行にわたる大文字 'N' (l. 763) で, 丁度このはじまりが示されている。ついでに4部の分割で無視されている, 他の大文字の箇所を指摘しておく. ll. 619, 1421, 1893, 2259. L. L. Hill, "Madden's Divisions of *Sir Gawain* and the 'Large Initial Capitals' of *Cotton Nero A. x.*," *Speculum*, xxi (1946), pp. 67-71 参照.

11. C. O. Chapman, "Virgil and the *Gawain*-Poet," *PMLA*, LX (1945), pp. 16-23.

12. E. Faral, *Les Arts poétiques du* XIIe *et du* XIIIe *siècle*, Paris, 1958, pp. 77-82; J. W. H. Atkins, *English Literary Criticism: the Medieval Phase*, London, 1952, p. 104; D. A. Pearsall, *op. cit.*, p. 129.

13. E. Faral, *op. cit.*, pp. 129-30, pp. 214-16; Atkins, *op. cit.*, p. 104; W. T. H. Jackson, *The Literature of the Middle Ages*, New York, 1960, *p.* 9; Pearsall, *op. cit.*, pp. 130-31.

14. E. Faral, *op. cit.*, pp. 76-77: Pearsall, *op. cit.*, p. 131. *SGGK*, ll. 952-69 も参照。なお ll. 1204-7, 1736-41 は T の効果を強めている。

15. *SGGK*, ll. 1010-15 も参照。

16. H. L. Savage, *The Gawain-Poet*, Chapel Hill, 1956, pp. 40-41.

17. E. Pons, *Sire Gauvain et le chevalier vert*, Paris, 1946, pp. 31-36; 成瀬正幾「中世頭韻詩の研究1」神戸商科大学記念論文集第2集第7号 (昭和33), pp. 105-8. 其他 Bestiary や罪を動物に当てる考え方等が参考になるだろう。なお, この作者は狩猟の知識と経験を持った詩人

であり，これは彼が貴族階級と接触していたことを明示している。

18. J. J. Parry (tr.), *The Art of Courtly Love by Andreas Capellanus*, New York, 1959, p. 184 (Trojel 版 (Hauniae, 1892) の英訳) ; J. Lafitte-Houssat, *Troubadours et cours d'amour* (*Que Sais-Je*? N° 422), Paris, 1950.
19. Parry, *op. cit*,. pp 106-7.
20. Jackson, *op. cit*., pp. 94-100 ;
21. C. S. Lewis, *The Allegory of Love*, 1951[5], pp. 13-18.
22. D. S. Brewer (ed), *The Parlement of Foulys*, London, 1960. pp. 7-8 ; 桝井迪夫「チョーサー研究」東京，昭和37, p. 33.
23. Jackson, *op. cit*., pp. 14-16 ; R. H. Green, *op. cit*.
24. Parry, *op. cit*., p. 107 ; J. F. Kiteley, " The *De Arte Honeste Amandi* of Andreas Capellanus and the Concept of Courtesy in *SGGK*, " *Anglia*, Bd. Lxxxix (1961), p. 11.
25. 恋愛の訓え13ケ条の第7条。Parry, *op. cit*., p. 81.
26. Savage, *op. cit*., p. 43.
27. Parry, *op. cit*., p. 184.
28. Parry, *op*., *cit*., p. 58 ; Kiteley, *op. cit*., p. 11. *De amore* と符合する点が多いが，両者の結付きには *Le Roman de la Rose* や作者とほゞ同時代の作品群が介在するものと考えられる。
29. *SGGK*, ll. 1658-63 を参照。
30. Savage, *op. cit*., pp. 33-35, 41.
31. *SGGK*, ll. 1942-47 も参照。
32. *SGGK*, ll. 644 ff. の説明及び中世におけるマリア信仰に留意。
33. Parry, *op. cit*., p. 82 ; Kiteley, *op. cit*., p. 13.
34. *SGGK*, ll. 1549-51. Everett, *op. cit*., p. 77.
35. K. Brunner, " Middle English Metrical Romances and Their Audience," (*Studies in Medieval Literature*, in Honor of Prof. A. C. Baugh, Philadelphia, 1961, pp. 219-27.)
36. I. Gollancz (ed.), *SGGK*, Notes, pp. 129-30 ; G. R. Owst, *Literature and Pulpit in Medieval England*, Oxford, 1961, pp. 375 ff.
37. 同上, Introduction (M. Day), p. xiii, pp. xxx-xxxi. 特に *Cleanness*, ll. 1022-48, 1057-66 参照。
38. Morton W. Bloomfield, " *SGGK* : An Appraisal, " *PMLA*, Lxxvi (1961), pp. 7-19. 彼はこの点を最も重要視し，wonder と suspense の面からの考察を提唱す。
39. E. R. Curtius (W. R. Trask(tr.)), *European Literature and the Latin Middle Ages* New York, 1953, pp. 417-35 ; M. W. Bloomfield, *op. cit*.